

清代帖学派の書論について

中 田 勇 次 郎

は じ め に

清代の書を論ずるとき、その大勢の上から帖学派と碑学派の二つに分つことができる。帖学派とは、法帖を学ぶことを主体とする書派をいい、碑学派とは、碑版を学ぶことに重点をおく書派をいう。帖学派は清代の前半期に栄え、碑学派は、後半期、嘉慶、道光のころを境界として、それ以後に発展した書派である。ここではまず、清代の前半期に繁衍した帖学派をとりあげて、その書論を見ることとしたい。ただ、この両派が截然として前後に分離して行われたのではなく、もちろん後半期においても、帖学派の書論の見るべきものはあり、また逆に、前半期において碑学派の先駆をなすものがあることは、書派の興廢の自然の原理の上からも、当然ありうることである。従って、ここでは、清代前半期を主とするけれども、後半に入ってからからの帖学派の理論をも併せて触れることとしたい。

清代帖学派の源流

帖学は法帖を学ぶことであるが、法帖というのは、主として晋の王羲之、献之父子、いわゆる二王の書をさしていうかたわらその他の名家の書をもふくめていうようになった。唐代に王書をさして十七帖という名称があるように、帖は王の尺牘をさして言うことばである。帖とは説文にもあるように、本来は帛書署、つまり絹の上に書かれた署名を意味する。ちょうど木製の簡牘の表面に書きつける署名を檢というのに対応する用語である。要するに書簡に帛を用い、帛の上に署名と併せて記事を書きつけたものが帖にあたる。紙がまだ行われていないころ、帛や木簡に文字を記した習慣の上から用いられたことばである。そこで尺牘のことを帖という名称でよぶようになったものである。ところが、唐末五代

から宋初にかけて、木版の技術が発達し、古人の模範となる法書を、木または石に刻して、墨拓としたものを作るようになった。現在見られるものでは宋初の淳化三年（九九二）に成った「淳化秘閣法帖」がこれにあたる。これは開巻の首にあきらかに「法帖」という二字を表題として出しているように、このような墨拓の法書のことを法帖とよぶ習慣はここに起因している。そこで、今日では、区分の便宜上、墨書した尺牘などの模範とすべき古人の書を多くは法書といい、墨拓にした古人の書を法帖とよぶようにしている。そこで帖学の場合の法帖は、「淳化閣帖」やその翻本などの流布されて以後の称呼であるから、もちろん閣帖を含むものではあるが、書の鑑賞の対象となるのは閣帖ばかりでなく、その原本に用いられた法書およびそのたぐいのものもあるから、ひろくこのような意味の法書をも包含している。従って帖学派の人々の学ぶ書蹟は、伝来する古人の法書と、刻して拓本にした法帖をあわせて用いている。清代の帖学派は碑学派に対応して主として二王とそれから派生し、また分派してきた書をとらえて学ぶものである。その分野の基本は、宋の米芾がその著「書史」のなかにとりあげた法書（墨書した書蹟をいうが、多少の刻帖をふくむ）によって示されているように、晋の二王から、六朝、隋、唐、宋にわたる名家の尺牘および詩文のたぐいの作品である。明代になって、法書法帖の鑑賞がさらに発達し、中期のころには王世貞のような法書の鑑賞のすぐれた学者があらわれ、後期になると董其昌が出て、宋の米芾の鑑識と理論を承けて、さらにその体系を明らかにした。これによって帖学派の対象とする晋唐宋元におよぶ名家の法書法帖の内容がどのようなものであるか、およその輪廓が形成された。清代の帖学派の人々がもっとも負うところの大きかったのは明の董其昌の鑑識と理論である。ただ、明人の刻した集帖などに碑版を混入していることは、法書法帖の分野が、やや拡大された現象のあらわれである。例えば、明の章藻の「墨池堂選帖」の中に唐の歐陽詢の化度寺碑が収められていることなどがそれである。これは帖学の中に、唐の名家の碑版なども、その学習の対象となるがゆえに、含められていることを示している。清代になると、帖学派の書が栄えてゆくが、その中にやはり唐楷の名品の、法帖と同じように冊子として行われた剪装された碑版が取り入れられてきているのもその傾向を表すものである。しかし、大勢から言って二王を祖とする法書法帖が主要となり、書の理論も、おのずからここから出ていることにはほぼ変わりはないと言ってよい。

清代の帖学派とその書論

帖学派は本来碑学派に対応するものであり、清代中期以後、碑学派が起るまでは、もっぱら帖学派が行われていたのである。これは書派とい

うよりも、書を学ぶについての通常の方法として、法書法帖を学習することが当然のこととして行われていたことである。その理論の出るところも、もちろん法書法帖を主体とするもので、それには六朝以来、隋唐宋元明へと理論の展開が行われてきている。帖学派の書論というのも、要するにこのような伝統的な書論の基礎の上に立って、さらに一步を進めると共に時代の性格を加えて行ったものである。ところで書論の定義については、すでに小著「中国書論史（中国書論大系第一巻）」に述べておいたとおりであり、その意味はかなり広範囲にわたる。清朝の康熙年間に成った「佩文齋書畫譜」に書体・書法・書学・書品の四つの部門に分って書論を考証している。この四つの分ち方は、書論を考える基本としては、きわめて妥当なものと思われる。しかし、これをさらに細分して考えることも可能である。近年では余紹宋が「書畫書録解題」において、書に關する著述のすべてを集録し、それを分類するのに、史伝、作法、論述、品藻、題贊、著録、雜識、叢輯、偽託、散佚、未見に分類している。この分類法は、題贊以下は、文体や編集形式上の区分であり、また、偽託以下のように、書論の内容とは関係のない区分もある。両者を比べてみると、やはり、「佩文齋書畫譜」の四分法の方がよく要を得ている。そして、書畫譜ではそのあとに、別に書家伝、書跋、弁証、鑑識という章を加えているから、これによって十分不足を補うことができるようになってきている。そこで、帖学派の書論を考える上にも、書体、書法、書学、書品の上に余氏の「書録解題」の方法をも勘案して觀察するのがよいと思われる。

さて、これらの各分野にわたって、清代の書論の著述はきわめて多い。これを大きく分けて考えてみると、まず、書体や書法に關するもの、これは作法としてまとめられているものである。これは文字とその書体と書の技法に關することを主とする著述をいう。例えば、笄重光の「書筏」、蔣衡の「書法論」、蔣驥の「統書法論」、蔣和の「学書雜論」、王宗炎の「論書法十一則」、朱和羹の「臨池心解」、魏錫曾の「書学緒聞」、周星蓮の「臨池管見」、姚孟起の「字学憶參」、張之洞の「張文襄公論書語」の諸家の著書が書録解題に掲げられている。みな書の技法を主体としている点には変りはないが、その内容は専門的なもの一般的なものさまざまである。

書学というのは、書の本質を論じたもので、本来、書論というものは、これをさすべきであるが、実際上は、広く書体、書法、書品等にもわたっている。書録解題では、論述篇に収めているのが、これに相当する。しかし、他の部門にわたっても、部分的に書の本質を論ずることはあるので、この論述だけに限定するわけにはゆかない。例えば、題贊とか雜識というような区分を立てていても、この中に論述に近いものも含まれている。

「書録解題」では、論述の通論の部に、楊賓の「大瓢偶筆」、王澐の「論書臆語」、程瑤田の「書勢」康有為の「広芸舟双楫」をあげ、雑論の部に、馮班的「鈍吟書要」、于令滂の「方石書話」、梁同書の「頻羅菴論書」、吳徳旋の「初月樓論書隨筆」を掲げている。この中の程瑤田の「書勢」は書法の項目を分けて論じた著述で、抽象的な理論を説いているためにこの論述の部に収めているが、これは書法の著書として取り扱う方がよい。于令滂の「方石書話」は入手や閲覧の困難な著書で、手近かに見ることのできないものである。また、雑識の部に、清の梁巖の「評書帖」と包世臣の「安吳論書」があげられている。この二書は、さきの論述に収めた書論と一緒にして取りあげることのできる内容をもっているから、これをこの種の書論の著書としても差支えないとおもう。「安吳論書」は碑学に関する書論の部で取りあげることにした。

次に、書品に関しては、「書録解題」には、清の桂馥の「国朝隸品」、楊景曾の「書品」を掲げている。この書品の方法による書の品第は、六朝から唐代まではまだ行われてはいたが、宋代以後は、ほとんど行われなくなった。書の見方において優劣上下を判定する古典的な方法をとることがほとんどなくなって、個人の人間性を重んずる方向に向ってきたためである。しかし、この方法を取って優劣と上下の順位を定める評論家も時にはある。包世臣の「安吳論書」の国朝書品も、神妙能逸佳の五品に分けて、清代書人の各体の書を品第している。翁方綱は唐碑についてもっとも研鑽を尽し、「蘇齋唐碑選」を著している。さらに、唐碑の中では欧陽詢、虞世南、褚遂良の三家をとり、その書品の優劣をよく論じている。多く各帖にしたためた題跋のたぐいにその論説を述べている。中でも化度寺塔銘にもっとも精魂を傾けて、詳細な題跋を多数に残している。かれの目標とする基準は、晋韻の神髓を得た書であるか否かにあり、そのために三家を取ってその品等を定めている。わけても欧の化度寺碑は古今楷法無上の神品とまで崇尚し、その理論のあるところを詳説している。その論法は、晋人を基本とする品質論にあり、単なる優劣上下に留まっていけない点では、宋芾以後に発展してきた新しい理論形式を備えている。清代の書品では見るべきものと言ってよいであろう。

（「小著王羲之を中心とする法帖の研究」所載、欧陽詢の化度寺塔銘、参照）。

以上のように考えてみると、清代帖学派の書論としては、書の本質を論じた書論が第一におかるべきであり、他の書体、技法、品藻のたぐいはその次にある。そこでこの時代の帖学派の書論には馮班がもっとも古く、楊賓、王澐がこれにつぐ。ほぼ清初の康熙年間ごろまでの書論はこの三家の著述によって見ることができる。馮班には「鈍吟書要」があり、楊賓には「大瓢偶筆」があり、王澐には「論書臆語」がある。これらに次いで嘉慶年間に行われたものとしては、梁同書と梁巖がある。梁同書には「頻羅菴論書」があり、梁巖には「評書帖」がある。それ以後で

は、呉徳旋の「初月樓論書隨筆」があり、朱和羹の「臨池心解」、周星蓮の「臨池管見」の二書もこれに含めることができる。この中では呉徳旋のものが一家の書論を立てた著述であり、清初以来の帖学派の書論と並べて見ることでできるものであり、あとの二つは清末になって大成されたもので、論旨は深い、時代も降るのでのちに改めて考えることとしたい。

清代の書論の特色の一つとして、叢輯の書論が多く著わされたことがある。書の全般的な指導書としての役目を果す著書として、書のすべての面からの必須の条件を説いたものがあらわされたのである。例えば、馮武の「書法正伝」、蔣和の「蔣氏書法正伝」、戈守智の「漢溪書法通解」、朱履貞の「書学捷要」がそれであり、これらの著述は民間に流布し、吾国にも及んで、広く利用された。この種のものに、もう一つ、魯一貞、張廷相同撰の「玉燕樓書法」がある。これらは多く古人の書論を採録し集成したもので、著書独自の書論としてよりも、学習に便宜なものとして多く行われた。

も一つ、付け加えておかねばならないのは、「書録解題」の中に、著録の部を設けていることである。これは公私の書画録を一類として立てたものであり、これは書の鑑賞の記録であり、書の鑑賞に必要な条件を正確に詳細に記録したものである。書の本質を論ずる一歩手前における鑑賞に属するものであり、理論的なものより実情を解題することに重点がおかれたものである。

以上の諸分野について考えて見たが、この中でもっとも重要なのは陝義の書論であり、書の本質を論ずることに主体が置かれる書論である。そこで、清代の帖学派の書論を観察するにあたり、これに属する上記の著書を取りあげて、その一つ一つについて書の理論を考えてみることにしたい。

馮班の「鈍吟書要」

馮班は明末清初に出た詩人で、(一六〇二—一六七二)字は定遠といい、鈍吟と号した。江蘇常熟の人。父が錢謙益と交遊していたので、かれも錢謙益の門に入り学んだ。詩文をよくし、兄の馮舒とともに文名があった。進士の試験には及第せず、結局、仕官せずに終ったらしい。詩は晩唐を好み、絶句に工みであった。西崑体の風をたつとび、とくに杜牧の詩を愛した。兄と共に「才調集」に評点を加えた。また、「嚴氏糾繆」を著して、盛唐詩を称した宋の嚴羽の「滄浪詩話」を弁じて、その誤繆を論じた。詩文集に「鈍吟全集」(内閣文庫)がある。「鈍吟雜

録」はその詩話であり、のちに趙執信がこれを見て感歎礼拝し、私淑門人と称したという。書は四体みな精妙であり、とりわけ小楷に工みであった。書論の著述に「鈍吟書要」があり、その詩話と同じく、博識で理論にすぐれ、清初において卓出している。（昭代叢書辛集、楊復古跋、美術叢書初集第四輯）。

「鈍吟書要」を通して見られるかれの書論では、書の時代性を論じたのがとくに注目される。そのことばに、「晋人は理を尽す。唐人は法を尽す。宋人は多く新意を用い、自ら唐人以上であると思っているが、実はそうではないのである。」

「晋人は理に循^{したが}って法が生ずる。唐人は法を用いて意が生ずる。宋人は意を用いて、古法がつぶさにある。このことが解れば、そこではじめて帖を鑑賞することができる。」

「唐人は法を用うることが謹厳であり、晋人は法を用うることは瀟洒である。しかし、まだ法のないものはないのである。意こそすなわち法である。」

「意を用うることは險であってしかも穩であり、奇であってしかも怪ではない。意は法の中から生ずる。これこそ心法であって、悟ることによって知ることができるものである。」という。

馮氏の説には、晋の理、唐の法、宋の意を論じている。これは、すでに明の董其昌が、晋人の書は韻を取る、唐人の書は法を取る、宋人の書は意を取る、と言ったのに本づくものであるが、馮はこの理と法と意の相関性をおきかえている。これは韻というよりも理すなわち自然の原理と言う方が法や意に対応するには一そう適している。馮はこの理と法と意の相関性をと、理から法へ、法から意へと発展していったといって、その流変性のあることを認めている。そして、宋より唐がすぐれ、唐より晋がすぐれているとして、晋に重点をおいている。しかも、宋の意にもつぶさに古法があるとし、さらに理、法、意のいずれも法のないものはないとする。意は法の中から生ずる。これこそ心法であって、悟ることによって知ることができるとする。この悟りの境にまで高揚しているところは、董其昌が書論と禅理を結びつけて考えていたところをさらによく論じたものと言わなければならない。

かれはまた、意は本領の中から来るべきものとし、古人を規模することに基礎をおいて考えている。本領は根本的な精神をさし、古人の中から選択して求められた典型をいう。千古不易の絶対的な境界をいつている。本領は將軍であり、心意は副將であるといい、本領は心意の上にあ

るものとする。この点では董其昌が、「宋人はみずからその意をもって書をつくるだけのことで、よく古人の意を有するのではない」と言っているのは異なっている。董のいうのは、蘇東坡のいう「我書意造本無法」の意をいうのである。馮氏の説は唐の太宗や虞世南の書論を読むような感じで、よく古典に徹するところに特色がある。

歴代の書家では鍾繇と王羲之の法を第一とする。古人を学習し精熟して到達しうる境地を目ざしている。唐では虞世南、歐陽詢をとり、顔真卿にも点画に法があるとし、宋では、蔡襄、蘇軾、黃庭堅、米芾の中、蔡襄の古法を得ているのを取る。元では趙子昂を取るが、明では一字も見られるものがないとした。ここにも厳しい古典主義をうかがうことができる。

清の楊賓の「大瓢偶筆」のなかに馮氏を論じて、鈍吟老人の書論は、大体、陳繹曾を祖としている。繹曾の「翰林要訣」十二章は本来、執筆を第一としている。それゆえに馮氏にも用筆と結体の二説があるのであるという意味のことを述べている。馮氏はまず古人の結字、すなわち閒架結構を学び、それが明らかになれば用筆を学べ、という。閒架には石碑を学び、用筆には真跡を学ばねばだめであるという。この点から考えても、馮氏の書論が、終始古典に基本をおいていることが了解される。

楊賓の「大瓢偶筆」

楊賓（一六五〇—一七三九？）字は可師といい、耕夫と号し、別に大瓢山人と号した。浙江山陰の人。康熙元年（一六六二）十三歳のとき、（又、康熙二年癸卯十四歳）父の越（字は友声）が友人の錢允武の罪に連坐して寧古塔（吉林省寧安県）の戍卒に流謫され、母もそれに同伴した。楊賓はやむをえず、弟の宝や姉妹たちとともに叔父のところへ養育された。二十一歳のとき、郷里の山陰に帰り、康熙十四年（一六七五）蘇州で結婚し、祖母がなお健在であったので、これを迎えて養い、のち、父の命を承けて蘇州に住することとなった。康熙二十年（一六八一）、督撫（総督巡撫）大吏の幕下にあつて山西に客となり、安徽、浙江、四川、福建の各地方を歴遊した。康熙二十八年（一六八九）、都に出て、次いで父の流謫されている配所を訪れて孝養を尽した。この間のことを記した著述に「柳辺紀略」がある。父の罪の恩赦を申し出たが、遂に康熙三十年（一六九一）、父は配所で卒した。そこで百方手を尽して父の帰葬を願ひ出て、ついに許されて母を迎え父の柩を奉じて、郷里に葬むることができた。かれが孝子として伝えられる所以である。かれは詩文を善くし、漢書や杜詩に精しかった。書はとくに巧妙で、塞外の人々か

ら楊夫子と称された。書法は宋元の習気に染まず、当時その名声は公卿の間に重んじられた。その交遊した人々は、張英、徐元文、徐乾学、韓莢、姜宸英、何焯、方苞、汪份諸公のような名士ばかりであった。ただ、父が罪人であったため、自ら仕官することがなくて終った。年は九十歳近くまで長生したという。「大瓢偶筆」所載楊大瓢伝に依る。

かれの伝記を見ると、父が配所に流謫されているので、まことに不遇である。しかし、蘇州に定住するようになってからは、多くの文人学者との交遊もあって、その愛好する金石碑版の鑑識に没頭することができたであろう。書に関する著述には「鐵函齋書跋」(六卷、芸術叢編所収本。また、楊霽(慰農)の道光二十七年に校刊した四卷本)があり、また「大瓢偶筆」八卷(書跋と同じく道光二十七年に楊霽の校刊した本)がある。金石碑版と法帖とにわたって、その博識と考証の精審なことにおいて、清朝の帖学の第一に推されるべき大著である。内容は三代からはじまり、秦漢三国六朝から、唐宋金元明国朝におよび、各代の碑版法帖をほとんど余すところなく論じている。巻首に楊霽が編した「大瓢所論碑帖纂刻総目備覧」に、その鑑識を経た碑帖の品目を列挙しているのを見ても、その精到なことに一驚するであろう。

いわゆる純粹に書の本質を論じた書論にあたるものは、「大瓢偶筆」巻六の論学書、巻七の論筆法、論筆墨の部分に限られている。ここにその論旨を考えてみることにする。

その書論は古典を崇尚するのを主旨としている。古人を学ぶには、その形模を学んではならない。その精神を得なければならぬ。その精神を得ようとおもえば、まずその意を得なければならぬ。意が得られるとそこで神が得られる、とする。この意というのは、王羲之の説として伝わる、意は筆先にありという意のことである。

学書の基本は執筆と用筆にあるが、執筆は双鉤法(二本指をかける法)により、懸肘の方法をとる。用筆の秘訣は、かならず神を凝らし慮を定め、万念が俱に空となり、しかるのち筆を下す。つとめて意を筆画の中に在らしめ、心を文字の外に籠らしめず、頓挫の勢で書きあらわす。こうして学習が円熟してくると、三年たたぬうちに、縦横上下、自在に書くことができるようになり、宋元の書などを奴隷視するようになる、という。

古人の書を学ぶには、唐太宗のことばのとおり、形勢にとらわれてはならない。骨力を体得すれば、形勢は自ら生ずるものである。これは千古不易の筆訣である。唐太宗の晋祠銘を観ればこのことがわかる、という。かれのいう骨力は書法の基本であり、その奥には神意が宿っている。

る。これを得るには尋常の法ではゆかない。そこでかれは古人の筆法を悟入によって説明する。唐の虞世南は道字をもって悟り、張旭は擔夫が道を争って鼓吹すること悟り、また、公孫大娘が劍器（巾舞）を舞うことで悟り、懷素は夏の雲で悟り、黄山谷は、長年盪漿で悟り、雷太簡は江声で悟り、文与可は蛇の闘うので悟ったという、と言って、悟入による体得法をとりあげている。

しかし、かれの書の目標は魏晋を第一とし、唐は初唐の欧、虞、褚を取り、それより以後は多く取らない。唐の李邕とか、宋の蘇軾、米芾、明の董其昌などは書家の旁門とし、屏絶しなければならぬものとしている。

書体の上からも篆隸を第一とし、唐の李陽氷以後、篆書の法が壊れたとし、張旭以後は草書の法が衰え、韓攄木のち八分が俗化したといっている。唐の中期以後の書体は概して取っていない。王厚之（順伯）のことばによって、宋朝は唐に及ばず、唐は漢に及ばず、漢は先秦古書に及ばずとし、それゆえに篆隸楷の一貫した道を悟得すれば、はじめて書を学ぶことができる、という。

古典主義の上に立って、しかも創作性を出すことを説こうとしている。そこで、悟入の問題が起るのであるが、唐の安史の乱前後に起った革新的な書の考え方は、本来、古典主義に反抗して起ったもので、互いに相容れないわけであるが、楊氏の説では、これを同時に取りあげて書論を立てるところに特色がある。

古来、書家には一定の師というものが無い。例えば、王羲之はもと衛夫人を師としたが、江南に移ってから、李斯、曹喜、鍾繇、梁鶴、蔡邕、張景等の碑書を見てはじめて大いに進んだ。とすれば李、曹、鍾、梁、蔡、張はみなその師である。それに専ら衛夫人を師としたと言っているのはよくない。米襄陽（米芾）はもと沈伝師、顔清臣（顔真卿）、柳誠懸（柳公権）を学んだが、また、歐陽詢、褚遂良、段季展、羊欣、師宜官、および王氏父子を学んでいる。とすれば、欧、褚、段、羊、師、王、みなその師である。専ら、顔、柳を米の師とするわけにはゆかない。そればかりではない。懷素が、夏雲、奇峰多くして変化を知る。とすれば、夏雲がすなわちその師である。黄山谷は長年、盪漿するのを見て筆法を悟った。とすれば長年はその師である。雷太簡は江声を聴いて筆法を悟った。とすれば、江声がその師である。文与可は蛇の闘うのを見て草書に長じた。それは蛇がその師である。張旭は擔夫が道を争うのを見て筆法を得、公孫大娘が劍器を舞うのを観て、そののち神に通じた。これは擔夫と公孫大娘がみな長史の師である。師というものが常に有るということではなくて、自分でどのようなものを師とするかを選択するのである、という。

この説は斬新であり、当時の帖学派の他の書論家にはここまで論じているものはない。ただ、伝統的な書法を承けついでいる人たちと、唐の中期以後のこの場合では懷素以下諸家の新しい書のかき方とは、性質を異にしている。一つは古法を守り伝える人たちであり、張旭、懷素は別に新しい発想を求めて新書法を出してゆく方法をとる人々であり、全く異質のものである。これを一つにして論じようとするところに、書の理論の発展の歴史を見ると、矛盾を生ずる。さきの悟入の説もこれと同様で、本来、異質のものを一つにして論じようとする所に無理がある。楊賓は本来、金石碑版の鑑識と考証にその著述の大部分を占めているので、鑑識の中に理論があると言えないこともないが、このような書の本質論になると、なおさらに伝統と革新の別を立てるべきではないかとおもう。けれども、ものの源流を究める上においては、よくここまで論及したものだと思わざるをえない。

かれは書体においても、篆籀隸楷を基本とすることをとき、正草を学ぶ人は篆籀を廃してはならないと言う。これも、ものの源流を究めるところから来ている。法帖のほかに、金石をとくに精しく考証していることも、法帖の源流が金石にあることを認識していたからであると思う。阮元のとく北碑南帖論の底流は、楊賓の研究の上にもその崩しを見せているというべきであろう。

かれの学書の経歴を見るに、幼少のころは父から曹娥碑や聖教序を学び、やや長じて黄庭経を学ぶ。叔父に養育されたころには黄庭経、董其昌、顔真卿、そして米芾の天馬賦を学ぶ。二十一歳、山陰に帰ってから聖教序を学び、四十一、二歳から五十一、二歳のころには筆法がいよいよ進み、欧の九成宮や化度寺の精楷や聖教序を学び、そのちはますます円熟して書法の濫奥を極め、頓挫の好境に到ると自ら告白している。その正統な楷法によって古人の意を達成するのがその目標とするところであったと思われる。

王澐の「論書臆語」

清朝の康熙中の書論家としては、王澐と楊賓の二人を取りあげなければならない。王澐（一六六八—一七四三）は、字は若林、また籀林といひ、虚舟、竹雲と号した。江蘇金壇の人。のち、無錫に住した。康五十一年（一七二一）の進士、官は吏部員外郎となった。程朱の学を修め、書学に精しく、淳化閣帖の研究に「淳化秘閣法帖攷正」があり、法帖の考証に「古今法帖考」があり、碑版法帖のたぐいの題跋集に、「虚舟題跋」、「竹雲題跋」があるなど、書学においてよくその鑑識を発揮した。書論に「論書臆語」がある。この本には百条にわたって書法全般につ

いて論じている。

その第一に崇尚したのは魏晋の書である。とくに鍾繇をとりあげ、その一正一偏、縦横変化し、規矩にとらわれることのない法外の巧妙さを称賛し、鍾繇を王羲之より以上においている。もちろんこれに次いで、王羲之の自然の妙境をも、その目ざすべき模範としている。古人の書のよいところは、意識の働きを加えないで、天機がそのままあらわれるところにあるとする。古人の書を臨模するには、形似に捕われてはならない。神似でなければならぬとする。それは神のみが知り、天上真人の想いがあり、その風度は和明朗暢であるのをよいとする。かれはこのことを、よく柳下惠を学ぶものは、魯の国の男子に及ぶものはないといい、また、骨を裂いて父に返し、肉を裂いて母に返すことをしなければ、どうして清浄法身を具現することができようか、という。この比喻は明の董其昌の書論に用いられているもので、柳下惠の故事は、ものの形似を捨てて精神を取るべきことを意味し、「折骨還父、折肉還母」は禅語に出るもので、董が、宋の米芾の書を評した言葉のうちにある。王澐の書論は、禅学を修めてこの言葉を用いているのではなく、実は董其昌から間接に取り入れているのではないかと思う。これも要するに神似の説と相通するものである。

王澐はまた、奇にして却って正しいという説をといっているがこれも董其昌の論を借りて魏晋の書の自然の精神をいたったものである。ただ、魏晋を学ぶには、唐の規矩から入り、規矩から離脱して、魏晋の人の韻致に到達すべきをいう。しかも、古人はそのまま受容するのではなく、よく取捨し、さらに変化する。この変化によってはじめて一家の書ができるとする。唐人は規矩に捕われたのでこの変化ができなかった。変化するには古人をよく学び、そこから変化の境を形成してゆくべきであるとする。工妙の極み、工妙になりえない境地、それを天真爛漫という。王羲之の蘭亭序や顔真卿の三稿がそれであるとする。その目標は魏晋にあり、唐では、欧、虞、褚、宋では北宋四大家をとるが、草書では、王羲之以後草書はなく、唐の張旭、懷素は墮落した書であるという。宋の四家では蔡襄をとる。馮班がそうであったように、宋の東坡、山谷、海岳という書人たちの革新性とは相容れない。王澐のことばに、書には筋骨血肉精神氣脈の八つの要素があるというのは、蘇東坡の説といかにも似てはいるが、東坡の立てた意の原理はここには見られない。それよりも遠い魏晋に徹した古典主義がその書論のうちに濃厚にあらわれている。

二 梁 の 書 論

乾隆から嘉慶にかけてあらわれ梁同書および梁巘には、いずれも書論がある。世に二梁とよばれている。梁同書（一七三三—一八一五）、字は元穎といい、山舟と号した。晩年には不翁、これは心経の「不生不滅、不垢不淨」の意を取って称した。九十歳以後は新吾長翁と号した。東閣大学士の梁詩正の子、乾隆十七年（一七五二）の特賜進士。翰林院庶吉士から侍講に昇任したが、養父の喪に遇い、郷里に帰り、遂に出仕しなかつた。嘉慶十二年（一八〇七）の郷試に際し、鹿鳴の宴に招かれるという榮譽をうけ、さらに侍講学士の官銜を加えられた。九十三歳の長生をして終った。詩文を善くするとともに、書においてもすぐれ、若いころ、顔真卿、柳公権から入り、中年、米芾、董其昌を学び、晩年は大成し、劉墉（石庵）、王文治と相並んで三名家の称があつた。その名声はひろく海外にも聞えた。書に関する著述に「頻羅庵論書」があり、また筆を集めて「筆史」の著がある。

書画の鑑賞録には「頻羅庵書画跋」がある。（美術叢書初集第五輯）。この中に董其昌の作九種を列挙してその称揚の語を述べているのを見ても、その平生の崇尚するところが想像される。また、別に「題跋」四卷がある。

そのほかの著述に「直語補證」がある。経伝史漢通俗の文および里巷鄙談全語、古人詩句の引用俗諺、常用俗字などから集めた通俗語を一巻にまとめたもので、それぞれに注解を加えている。辛丑冬日の序があり、乾隆四十六年（一七八一）五十九歳の著作である。また「古窯器攷」には古今の諸窯とその研究を載せている。また「古銅器攷」があり、古銅の鑑識法を説いている。これは併せて「古銅器攷」と称し乾隆丁丑（二十二年一七五七、三十五歳）の序文がある。ただし、「古銅器攷」はほとんど古人の記事を借用したもので自述のものではない。しかし、これらの著述を見てもその多趣味な人物であつたことがわかる。今、「頻羅庵遺集」十六巻としてその諸著作が収められている。

「頻羅庵論書」は門人張燕昌（一七三八—一八一四）、孔繼涑（一七二六—一七九〇）、陳統、温純（一七六四—一八〇八）に与えた書論に関する書簡を集めたものである。張燕昌は、字は文魚。号は莒堂、別号金粟逸人。浙江海塩の人。文魚の字は手に魚紋があつたので名づけたという。金石に精しく、「金石契」の著書で名高く、北宋拓の石鼓文を入手して家で模刻し、併せて「石鼓文積存」を著した。また「飛白録」がある。丁敬に師事し、篆刻をよくし、西泠派の名家として知られ「莒堂印譜」がある。画は山水人物から蘭竹花卉みな善くした。作品の伝わるも

のは少ないという。孔継涑は、字は信夫、山東曲阜の人、谷園と号した。乾隆三十三年（一七六八）の挙人。幼くして張照の娘を妻に迎えた。書をよくし、専ら張照を学んで酷似し、小司寇と称せられ、書を求めるものが多かった。古人の墨跡碑版を愛好し、その鑑別の精審をもって聞えた。その刻した法帖はきめて多い。玉虹樓帖十六卷、玉虹鑒真帖二十卷（二十四卷）、谷園摹古帖二十卷、国朝名人法書十二卷、張照の瀛海仙班帖二十卷等がある。清代の刻帖の中では、法帖の鑑別も精しく、鐫刻も良好で、佳帖に属する。その鑑識をつちかったのは、この梁同書の書簡であり、これによってその素養をうかがうことができる。陳統は字は蓮汀、秀水の人。梁同書の門下であり、梁書を刻した瓣香樓梁帖六卷があるという。温純も梁の知人として伝記がある。これらの人物を見ると、この「頻羅庵論書」の背景がどのようなようであったかがわかる。とくに、張、孔両氏のような金石碑帖の名家をその通信の相手としていたことには意義が深い。

ただ、この「頻羅庵論書」は特定な人物との往來の書簡であり、全般的な立場でかいた書論ではないので、その理論の面にも、完全を期することはできない。機に臨んで対応した書論であるがために、多少の不備は免れない。しかし、張、孔のような書についての鑑識のある人物を対象としているから、その点では、実のある書論となっている面も考えておかねばならないであろう。

日本で梁同書にもっともゆかりのあるのは市河米庵である。米庵は文化十二年（一八一五）、梁同書の最晩の年に、その書論を贈られている。かれはそれを「山舟書論」と題し王澐の「論書賸語」と朱履貞の「書学捷要」とあわせて「清三家書論」として刊行している。（文政七年刊）。この「山舟書論」の末尾に、「癸丑二月六日山舟同書時年七十又一」とあり、この書論の成立が乾隆五十八年（一七九三）であることがわかる。米庵が自書した試毫帖を刻した帖を、先君（市河寛齋）が長崎へ行くときに託し、それを通訳の劉梅泉に示し、劉はまたこれを清客王復初に示し、王はまたこれを浙江に持ち帰り、梁山舟に示した。梁はその帖に跋を加え、併せて自著の論書帖一本を米庵に寄せたのである。米庵はこれを王、朱二家の書論の後に付して刊行したのである。このような来由を文政元年（一八一八）の跋語に記している。

梁同書の書論は書簡文であるが、帖学派の特色がよくあらわれていて、古典を主体とする理論が随所に説かれている。姜宸英の臨書法帖を評して、自分の性情を神理に合致させて、似ていないようで似ているところがよいのであるという。古人の形似に陥らないで精神的な原理を汲みとることが大切であることを言っているのである。

また、古人の性情の沈着痛快というのは、六朝以来の書論に言われているところであるが、これを論じて、この痛快だけではよくないので、

沈着ということがなければならぬ。米芾が「垂るとして縮まざるなく、往くとして収まらざるなし」という八字の妙諦がこれにあたるという。古来の藏鋒というのも、このことを言ったのである。米の書を学ぶもので、南宋の呉琨などは、痛快沈着、形似も神似も議論の余地のない書といふべきであるといって称揚している。ただ、沈着痛快を兼備することは容易ではなく、現代の人々にはなおさら困難であるという。

古人の書は一つ一つが異なっていて、同じものはない。一帖ごとに一つの書のすがたを備えている。それは、どうしてそうなるかわからないのに、そうなっているのである。李邕が「我を学ぶものは死し、我に似せるものは俗なり」と言っている。これはまさしく「木仏に向って舍利を求めぬ」ようなものである、という。

古い法帖は晋唐宋元にかかわらず、みな書聖王羲之に淵源があるとしても、各自のすがた、各自の精神と意度はそれぞれ異なっていて、学ば人々の選択のままになる。もし、学書において、臨摹ばかりつとめたり、一書家に集中すると、繆着して伸長しなくなってしまう。自分の意をもって古人を迎合することは容易であるが、古人の法をもって自分を束縛することは難しい、という。これは要するに古人の書の精神をとらえて、形似から離脱することを基本とする理論である。

古人が、筆力が紙背に透ると言っているのは、天馬空を行くということを考えてみればよいので、具体的につき透るという意味ではない。これは精神気力が結集し、墨光が浮び溢れている状況を形容して言っただけのことである。米芾のことばに「一筆々々、紙を圧え、一筆々々紙に着かない」とあるのがよいのである、という。この説明にも禅宗の妙悟に通ずるものがある。

意は筆先にあり、と言うように、書というものはとらえどころもなく、自然に流れ出るものである。懷素の自叙帖のようなものがこの意でかかれた例である、という。

一気貫注ということをいうが、これは行草の連綿体でかくことではない。習熟して自然に成就することを言うので、技巧的に意識的にやることができるものではない。習熟するためには気力がなければならぬ。気力があればおのずから筆勢を生じ、大小長短、高低、敬整が筆のおもむくがままに、自然に貫注される、という。

この書論は、書簡によって指示を与えているので、ところどころ書の技法を論じているところがある。書をかくには軟かい羊毫筆で、筆鋒の長いものがよいということをしきりに説いている。かれには「筆史」という著述もあるように、筆についてはとくに細心の注意を払っていたよ

うである。軟筆を用いると靈妙に書ける。墨はたっぷりつけ、落筆は速いのがよい。速ければ意があらわれる、という。いわゆる率意の書は速くかくことによって達成されることがあるのと同様である。

柳公権の玄秘塔碑は極軟筆で書いたものである。米芾がこれを悪札としてしりぞけているのは誤りである、という。この説はどう考えても妥当とは思われない。しかし、軟筆によって、「心正しければ筆正し」という心の正しさを得られるというのは、一応の理論であり、また、それがかれの書論の一つの特異な要素となっていると言えるであろう。

このように筆とその用筆法によって、一家の書風を形成して行ったのが、かれの書論の特色となっているところは注目すべきである。

梁獻（生卒未詳）、字は聞山、号は松翁。乾隆二十七年（一七六二）の挙人。官は四川巴東の知県となった。著書に「評書帖」が伝わるだけで、詳細な伝記はわからない。「評書帖」は門人かと思われる士淦（姓は不明）が遺稿を集めて編集したもので、百四十一則の断片的な短文の書論を集成したものである。内容を見ると、書の全般にわたって、広く見識をもっていたようで、晋の王羲之の蘭亭序から、唐の欧、虞、褚、陸、孫過庭、李邕、徐浩、張從申、顔、柳、沈佺師をとりあげ、宋では、淳化閣帖をはじめ、歐陽脩から、蔡、蘇、黄、米、さらに蔡京、蔡卞に及び、南宋では高宗、米友仁、張即之、元に入っては趙子昂、鮮于樞、雪庵、明に入っては、文、祝、董のほか明末の張瑞凶、王鐸をとりあげ、清代では張照、汪士鋐、王鴻緒、楊賓、王澐、程韋華、何焯などをあげている。書の全般の歴史に通じ、その系列をもわきまえたことが推察される。書人のほかに碑版法書法帖や集帖にも及び、書人の諸家の執筆法をもっとも重要なものとしてとりあげ、書人の品評、優劣上下の品第をなし、書の特徴をとらえることはよく要をえている。

書の時代性を論じて「晋は韻を尚び、唐は法を尚び、宋は意を尚び、明は態を尚ぶ」という。晋唐宋については董其昌の語を襲っているが、明は態を尚ぶというのは、かれ自らの付け加えた説であり、明の特質をよく論じたことばである。さらにまた、「晋人の書は、神韻が瀟洒であるが、流弊は軽散なところにある。唐の賢人は、これを法をもって矯正した。そこで整斎嚴謹となったが、流弊は拘苦にある。宋人は唐人の習気を脱しようと思って、意をもって、書を造るようになった（蘇東坡の我書意造本無法をいう）。そこで運筆は縦横、余りあるほどであったが、韻は晋に及ばず、法は唐に逮ばなかった。元、明は宋の放軼を厭いながら、なお晋人の軌を慕ったが、世代が既に降り、風骨は少し弱くなった」という。この評は時代性の流変をさらによく説いたことばであり、帖学派の本領をよく示すものと言ってよい。

学書の方法としては、書を学ぶには、古人のあとについてゆかねばならない。現代の人に依存してはならない。古人を学ぶにはその神骨を得なければならぬ。いたずらに外白を真似てはならない、という。ここにも帖学派の常道がある。そして、学書の課程としては、まず楷書を学び、次に行草をやるが、学書は経書の研究と同様で、博く渉らねばならない。その上で目標を定めて一家の学問を深く修得し、次いで諸の美点を採りいれ、変動に拘束されないようにすれば、性情を掩いかくさないで、おのずから門逕を開くであろう、という。古人を追慕することと、性霊を饒かにすることが、うまく調和し、両立するとき、その功が成就する。古人の穩適蘊藉に赴けば、気魄骨力がなくなる。気魄骨力を求めると、穩適蘊藉がなくなる。この加減調整がなかなか難しい、という。かれはこの原理を基本として、智永をとき、欧、虞、褚をとく。その論理は他の書論家に比し、卓抜であり、よく諸家の特質をとらえることに長じている。各代の諸家を一々とらえて、このような方法により精しく品評を加えているのは、実に称揚すべきものがある。

執筆法の源流を説いて、はじめ董其昌がこの法を沈荃に伝え、沈荃は王鴻緒に伝え、王鴻緒は張照に伝え、張照は何国宗に伝え、何国宗は梅鋈に伝え、梁獻は学書三十年ののち、はじめて梅鋈によってこの法を得た、という。これによって達成されるのは、要するに晋人の書であり、その晋人に到るためには唐人の碑を臨してその骨格を立てなければならぬ、という。仮の晋字を学ぶのは、真の唐碑を学ぶにこしたことはない、という。かれが、唐の欧、虞、褚の楷書にとくに精しく説いている理由も、これによって了解される。帖学派の理論が、法帖に偏頗になれば、文字の基本に難色を生ずるので、唐の碑版によって、文字の本来の基本を養うことにつとめていることが、ここにもうかがわれる。

かれの書論は、ただ、断片的な記録の集成にすぎないが、内容には珠玉の語があり、清代の書論の中にあって、やはり取るべきものをもっていえると言ふことができよう。

呉徳旋の「初月楼論書隨筆」

清朝の後半期になると、帖学が衰えて碑学が興ってくることは、一般的な現象であるが、そのうちにも、帖学の流れが絶滅したわけではなく、伝統的な書法を守る人々は健在していたようである。ただ、帖学派の書論の著述を探ってみると、一家の書論をまとめて著したものは、前半期ほど活潑ではなく、多くは書法の指針の書としての、古人の諸説を叢輯した便宜な著述が多くなっていく傾向がある。こういう中で、一つ

呉徳旋の「初月楼論書隨筆」を見るべきものとして取りあげることができよう。

呉徳旋（一七六七—一八四〇）は、字は仲倫、江蘇亶興の人。詩文をよくしたので知られる。古文家として惲敬、陸繼絡、呂璣等がみな推重したといわれる。詩もまた高澹絶俗と評されているのを見ても、その人物が想像される。文集に、「初月楼文鈔」十卷、続鈔八卷、詩鈔四卷があり、また「初月楼聞見録」十卷、続録十卷があり、「重刊統編亶荆貞志」の編纂も行っているなど、文才の豊富であったことが了解される。書にも一家をなしていたようで、「芸舟双楫」では行書能品下に品第されている。今、その書論に「初月楼論書隨筆」がある。（美術叢書初集第二輯、又、別下齋叢書所収）。

「初月楼論書隨筆」は論書の文およそ三十七則を一書に編成した著述で、標題のとおり、論書の隨筆集である。後に道光十一年（一八三一）の自跋があり、自分が郷里に家居していたころ、初めてこの稿を脱し、門人の程子香がこれを持ってゆき、子香が没してのち原稿の行方がわからなくなったが、道光十一年（一八三一）に四明（浙江）の館中に入ったとき、門人の康康侯の手録した一本を旧篋より見出し、それをふたたび自書したのがこの本であることを述べている。よってこれは自筆の著書から出たものであることがわかる。

その学書の自述によると、はじめ若いころ唐の韓愈の詩文を篤好し、その文中に、「性、書を喜まず」という語があるので、書のことには気とめなかったが、三十歳になってから、発憤して書を好むようになった、と告白している。その当初に先づ学んだのは宋の蘇軾と明の董其昌との二家であった。しかし、この二家に入ったものの、まだ自分の、行く方向に迷っていた。そこで、淳化閣帖を学び、王献之と唐太宗の筆勢の馳騁する書風を愛し、自ら体得しようとしたが、ますます源流に迷った。これからのち、唐宋元明の諸家にとりくんで、十年あまりたって、私の好きなのは依然として蘇東坡と董思白（董其昌）であることにかわりはなかった、という。そこでまた包世臣の説をきいてから、自分の信ずるところはますます堅くなった。包世臣は、東坡と思白の二家を推薦して、東坡の雄逸、思白の簡淡は他人の及ぶところではない。東坡を学ぶにはその爛漫さを淘汰するがよく、思白を学ぶにはその刁疎さを避けるがよい。爛漫さを淘汰すれば、雄逸さをはじめて顕れるし、刁疎さを避けるならば、簡淡さが真実になる、という。そこでかれはこの爛漫と刁疎は、二家にとって欠点であると同時に美点でもある。この二家を学ぶにはこの美点を体得すべきで、欠点を受け入れてはならない、とする。そのとき、包世臣から、楊凝式の歩虚詞を学ぶように指導され、それより一日に一度この帖の学習を怠ることなく、この帖を通じて、蘇、董二家の意趣を会得するところがあることを知って驚喜満悦する、ことを述

べている。歩虚詞は董の戲鴻堂法帖にも刻されている。この書は草書で書かれたもので、かれはこの草書によって、書の草率の意を悟ることができた。そのことばによると、友人の錢伯坻（魯斯）から、書をかくには草率ということがもっとも難しいと教えられた。しかし、はじめはその意味がよくわからなかった。のち、懷素の小千字文を学んで、ほぼ草率の意味がわかった。ただ、王羲之の十七帖ではまだ草率ということとはわからなかった。ところが、楊凝式の歩虚詞を学ぶようになって、草率というのは細淨の至りであることがわかった、という。

かれの書の学び方の基本は、すべてこのようなところから出発している。従って蘇東坡には最上の稱賛をなしている。蘇東坡の筆力は雄放、逸気は横霄、文章には気節が溢れ、一切を俯視する気概があり、天然のままに筆が動き、自分では意識しないで書ができあがった、という。そして、蘇東坡の出自も、楊凝式を学んで、神似を得たところにある、とする。蔡襄は顔真卿を学んで恬和さを出したが、和は雅に入ったが恬は俗に近く、東坡に比べると劣っている、とする。蔡襄を東坡より劣るとするのは、清初の帖学者の多くが、東坡より蔡襄を高く評価するのと異っている。

黄山谷を評して、黄にはそれなりに佳いものがある。かれは顔真卿、楊凝式二家から力を得ている。それゆえに蘇東坡とたがいに補うことができるのである、という。米芾を論じて、かれの草書は、つとめて王献之を追求しているが、わずかに孫過庭と抗衡するに堪えるばかりである。これを晋人の室に入ったとするのは、まだもう一つ及ばないところがある、という。宋の三家では、東坡を推称し、褚（遂良）、楊（凝式）、顔（真卿）に出入し、真に淡にして収受することのできない妙味がある。米の嬋娟羅綺の比ではない。包世臣が、宋賢ではただ東坡のみが神解を具えている、という。このことばはほんとうによく言い得たものとおもう、と言っている。

元では趙子昂を論ずるが、趙を学ぶにはその真蹟を臨摹すべきであるとし、趙を学ぶには根柢を立てなければならぬとする。根柢とは唐人の書で基本を習うことであり、唐人を学ばなければ立脚するところがない、という。

明人では、顔真卿を学んだものとしては、倪元璐より以上に出るものはない。楊凝式を学んだものとしては、董其昌より以上に出るものはない。この時代には作者は多いけれども、この両雄を第一とする。董其昌は、盛んに米芾を推薦している。米の行草は王献之、唐太宗を追求し、筆勢の馳騁する書法を好んで、その怒張の習気を掩いかくすことができなかった。董の平淡なところは海岳よりまさっていると見てもよい、という。これを見ても、本来、米から出た董を、米より高く評価している点は、かれの目標が董にあったことを想わせるものがある。

清朝では姜宸英を娟秀とし、劉墉は醇厚で六朝人の遺意があるが、ただ縦逸さがないとし、陳奕禧、張照は、相並んで名声は高いが、凡骨はまだ換っていない。やはり明末の倪元璐などに比べると遠く及ばない、という。

かれの書論の要旨は、以上のように、包世臣から出て、蘇、董二家を重んずることに集中し、古典主義の書論に触れることはむしろ少ない。蘇と董は同系の書論であるが、同一の論理をなすものではなく、董はむしろ米に近いのであるが、この辺のところも自らの情意に傾きすぎる点があるように見える。一家の論をなしているところはよいが、目標に拘りすぎる面があり、大局の古典論にもっと堅実な意見を出すべきではなかったかと思われる。

む す び

清代は学術の大きく進展した時代であるから、書においても、その学問的な背景によって、従来の書論にくらべて綿密に論理を尽し、さらに資料的にもめぐまれて、歴史的な書の流変についても、よくそれを把握することができるようになった。

帖学派の目標とするところが、魏晋にあることは、古くから変りのないところで、本格的な書論を立てる人は、とくに魏晋を宗とすることを強く主張する。その論理は、六朝から唐にかけて、大体の骨格は成立しているので、その上にさらに深奥さを加え、また、禅宗の要素と解釈を付け加えるものが見られる。天質自然といい、神似といい、天真爛漫というなど、基本的には古典の書論の原理であるが、その応用的な活用は増益したものを感ぜしめる。更に、各時代の時代性をとぎ、諸名家の特性を論じ、また、具体的な碑版法帖のたぐいをとりあげて、その品藻を定めるなど、書の歴史の全般的な体貞をよく表すことができるようになったことも、前代を凌ぐものがある。書論というのは書をかくことの上に立ち、まずその意義を理解し、その論理を尽して、その信念を堅めたのち、それを作品の上に実証することを理論づけるものであり、清代は学問文化の進展した中であって、中国の伝統的な帖学の基本的な原理を確立することができたと言わなければならない。もちろん、一人々々の説く原理には特色があり、差異も生ずるが、帖学の古典的な性格は失われることはなく、あるものは、唐以前をとり、あるものは宋以後をふくめ、またあるものは宋以後に重きをおくものもできている。しかし、帖学の本質としては、書は篆籀隸楷に基本をおくべきものとして、唐楷を重んじ、清代の金石学の勃興にもなつて、金石が帖学の分野の中に混入することが行われるようになったことなども、前代に見られぬところであ

清代帖学派の書論について

り、やがて次の新しい金石、すなわち北碑の発展にようやくその変白をやむなくされるに到ったのである。